

立教のキャンパスとその立地について

鈴木勇一郎

はじめに

大学にとつて、教育や研究が営まれるキャンパスは、非常に大きな位置づけを持つことはいうまでもない。大学のキャンパスに関しては、建築史的な観点からの研究のほか⁽¹⁾、主に都市化との関連で論じられてきた⁽²⁾。

筆者は、キリスト教学校のキャンパスの成り立ちにについて研究を進めてきたが、キリスト教学校においては、他の官公立や法律系などの私立とは異なり、ミッシヨンと建築家との関係がキャンパスのあり方にも大きな影響を及ぼしていたことを明らかにしてきた⁽³⁾。

一方、都市化との関係からキャンパスの歴史を分析した木方十根は、戦前におけるキャンパスの推移を大きく分けて二つの時期に区分している。

第一の時期は、一九世紀の後半から二〇世紀の初頭に

かけての時期である。この時期には、大名屋敷のような近世都市の空間的ストックを利用した形でのキャンパス形成が進んだ。

第二の時期は、一九〇三年の専門学校令の公布以降の時期である。この時期には、近世都市のストックを持たない、郊外におけるキャンパスの形成が進んだ⁽⁴⁾。

こうした、既成市街地とその後新たに拓かれた郊外でキャンパスのあり方を大きく区分するのは、実際の大都市における都市化とパラレルな関係を持っていたからだ。キリスト教学校の場合でも、関西学院の上ヶ原キャンパスに典型的に見られるように、こうした都市化との関連が大きな位置を占めることは確かだ。立教のキャンパス形成においても、基本的にはこうした都市化との関係ぬきに、その位置づけを考へることはできない。

しかし、これまで筆者が指摘してきたように、ミッ

ションとの関係性やキリスト教教育との関係も大きな要素である。実は、建築だけでなく、キャンパス自体にもこうした問題は通底している。キリスト教学校の場合、キャンパスについても建築に関心が向きがちだが、その立地に関してはそれほど目が向けられてきたわけではない。

本稿では、キリスト教学校のキャンパスの立地について概観するとともに、その中で立教大学のキャンパスの位置づけとその意味について検討したい。

1、居留地とミッション・スクールのキャンパス問題

(1) 築地居留地と東京のミッションスクール

幕末から明治初期にかけて来日したキリスト教各教派の宣教師は、日本伝道を進めていく中で、教育をその手段のひとつとして重視していた。学校を作りそこに広く日本人の青少年を集めて、キリスト教の教えを広めていくように考えたのである。

しかし、当時外国から日本にやってきた各教派の宣教師たちは、どこでも自由に私塾や学校を設立できたわけではなく、基本的には「居留地」と呼ばれる特殊な空間に限定されていた。

居留地は、開港場である函館、横浜、神戸、長崎と、

開市場である東京、大阪に設定されたが、いずれも「日本の中の外国」ないしは「日本における外国文化の窓口」としての役割を果たした。

宣教師たちも自ら塾や学校を設立しようとする場合には、この居留地かその周辺に設けられた雑居地に事実上限定されていたのである。明治初期までに設立されたミッション・スクールは、各都市の居留地かその周辺で設立されていることが大半であった。

もちろん、キリスト教の伝道を進める宣教師たちにとって、日本の中の外国である居留地よりは、一般の市街地に学校を作ることが望ましいのは言うまでもない。多くの宣教師たちが居留地から離れて学校を作ろうとしたが、実際には制約が多く困難であった。

開市場となった東京の居留地は築地に設定された。貿易港である横浜の居留地の住民は、貿易商人が主流だったが、首都である東京の築地は、こうしたキリスト教関係者や施設、教育関係者がその多くを占めていた⁽⁵⁾。つまり、東京における外国文化の窓口として築地居留地は機能していたのである。

もちろん、宣教師の中には、築地のような東京の中の外国ではなく、一般の市街地に進出して教育事業を行いたいという願望は広く存在していた。中にはメソジスト監督教会海外婦人伝道部の宣教師ドーラ・E・スクーン

メーカーのように、実際に築地を出て麻布で女子小學校（一八七四年）を開校するような試みも行われた⁽⁶⁾。だが、当時の状況では、外国人宣教師が居留地や雑居地の外に出て、塾や學校を運営していくには、まだ条件が整っていなかったのだろう。女子小學校も麻布に設立後、三田など短期間に場所を転々とした後、一八七八年に結局、築地居留地に移り、海岸女學校と称するようになっていた。居留地に移ってからの海岸女學校は運営が安定し、後に青山女學院へと発展を遂げている⁽⁷⁾。

このように、明治初期の東京に設立されたミッション・スクールのほとんどは、築地ないしはその周辺を發祥としている。現在、築地にはいくつかの教会や聖路加國際病院など、かつてここがキリスト教伝道の拠点だったことを偲ばせるものはあるが、現在ここに当時から続くキリスト教學校はひとつもない。

特に、東京のような大都市の場合、居留地であった築地から次第に離れていくこと自体が、學校の性格とその変容を物語る大きな指標ともなっている。

外国人宣教師が、居留地の外に出て學校を經營しようとすれば、日本人の協力がどうしても必要になる。仮に、外国ミッションが資金を出して土地を購入したとしても、彼らの名義にすることができなかつたのである。そこで、表向き日本人の代表者を立てて、彼らの名義に

することになるが、この場合、どうしても日本人の發言力が強くなつたり、ミッションとの間に摩擦を起こしたりすることも少なくなかつた。

明治期のキリスト教宣教師と現地のキリスト者との力関係を分析した小檜山ルイは、その立地からミッション・スクールの三つの類型を挙げている。

- 1、居留地の中で外国人宣教師主導。
- 2、居留地外に立地。日本人の發言力増大。紛争起きやすい。
- 3、日本人が自ら設立運営⁽⁸⁾。

まず一番目は、居留地内で外国人の宣教師が主導して設立する場合である。居留地の中では、外国人も不動産を取得したり（永代借地権）、學校を設立したりすることも可能であつた。そうした意味で學校を經營するには利点も多い。だが彼らはキリスト教を広めるために来ているのである。居留地という「日本の中の外国」に安住していたのでは、日本にキリスト教を広めるといふ目的を達成することはおぼつかない。

そこで二番目の選択肢として、外国のキリスト教派が居留地の外の一般の市街地に學校を設立するという動きが出てきた。このほうが日本社会で広く伝道するという彼らの目的からすれば望ましいことは言うまでもない。だが、居留地の外では、外国人が住んだり、ましてや学

校を設立するということは、当時の制度下では不可能なことであった。

そこで、実際にはミツシヨンや宣教師が出資して経営するとしても、名目上は日本人が所有して経営するという方法が編み出された。だが、仮にその日本人が破産したりすれば、ミツシヨン側は、相当困難な状況に追い込まれることはいうまでもない。さらに、名目上でも日本人キリスト者の責任者を立てるということは、彼らの発言力を増大させる結果をもたらし、主導権をめぐるせめぎあいを招くという状況が往々にして出現することになる。

だが、次第にそうしたリスクをとってでも居留地から市街地に出ていく学校が増えていくようになった。やはり、居留地では日本社会への伝道の効果という点から見ると、決して有利ではなかった上に、土地も限られていたので、教育を展開するのに十分な広さを確保しづらかったのである。

東京では、遅くとも大正時代までに築地(改正条約発効により、一八九九年に居留地廃止)から、ミツシヨン・スクールは姿を消し、他の土地へと移転していった。実は、こうした立地の違いが学校の性格を大きく左右してきた。

(2) 築地と立教

一八七四年にチャニング・M・ウィリアムズは、立教学校を創立している。当初、居留地外の一般の市街地に場所を求めたが、実際には困難であった。その位置は築地ということはおわかってはいるものの、その中で居留地内だったのか、それともその周辺の雑居地にあったのかも含めて、正確な場所は現在でも不明である⁽⁹⁾。このことが示すのは、創立当初の立教は、小規模な私塾的存在であり、キャンパスはおろか、本格的な校舎も存在しなかったということだ。まもなく居留地内に移転するが、その後も居留地の中で移転と拡張を繰り返していった。最終的には合計一四地区の永代借地権を取得し⁽¹⁰⁾、ここにいわゆる六角塔の校舎などを建設していった。

一八九九年、改正条約の発効に伴って、居留地は廃止されたが、立教はその後築地に留まり続けた。実はこれが二〇世紀初めまでの立教の立地の特徴であったといえる。他の多くのミツシヨン・スクールは、創立当初には築地居留地かその周辺で立地していたが、その後、次第に当時の市街地の外延部に移転して、本格的なキャンパスを構えるようになっていたからである。

(3) ミッション・スクールの性格変化とキャンパスの立地

① 東京英和学校と青山

築地から移転していった学校の例として、ここではアメリカのメソジスト監督教会系の青山学院について見てみたい。

メソジスト監督教会の宣教師として、最初に東京に派遣された宣教師はジュリアス・ソーパーであった。彼は、築地居留地に拠点を据えるときともに、一般の日本社会に対して働きかけを強めようとした。こうした中で、一八七八年に自らの主導で耕教学舎という私塾を、築地一丁目に立ち上げた⁽¹⁰⁾。だが、耕教学舎の教育はまもなく行き詰まった。結局ソーパーらは塾の運営を、同志社を中退したばかりの元良勇次郎と和田正幾という、若い日本人に任せることになったのである。二人は、耕教学舎を銀座三丁目に移した上、校名も東京英学校と改称した。だがその後も麻布区新堀町、再び築地二丁目へと短い期間に場所を転々とするなど、その運営には不安定さがつきまとい続けた⁽¹¹⁾。

ここで注意しなければならないのは、居留地の周辺に立地することはあっても居留地の中には一度も入っていないということがある。先にも述べたように、この時期ミッション・スクールが居留地外に立地しようとした場

合、実質的にはミッションの経営であっても日本人の経営という建前にしなければならず、必然的に日本人の発言力が強い状況となる。それでもミッションが校地や教員といった形で十分な援助を行なっていれば、外国ミッションの主導性が確保されるのだが、この場合、場所を転々としなければならなかったことにも示されるように、母教会からの援助はあまり頼りにならなかつたようだ。こうした状況が学校の性格と立地の不安定性を増幅していたのである。

一方、日本伝道総理ロバート・マクレイは、日本人の伝道者を要請する必要を感じ、横浜山手の居留地内に一八七九年に美会神学校を開いた。だが、しばらくすると全国から優秀な青少年を集めるためには、横浜よりも東京が望ましいと考えるようになっていった⁽¹²⁾。

こうした状況を打開するため考え出されたのが、青山への移転と東京英和学校の創立であった。それまでの小さな校舎を転々とする状況を脱して、広い敷地を確保した本格的なミッション・スクールを設立することを構想したのである。

そこで移転先として浮上してきたのが、赤坂区青山南町にあった開拓使の実験農場の跡地である。よく知られているように、開拓使は北海道の開拓を進めるために設置された官庁であったが、一八八一年に廃止され土地な

どの民間への払い下げが進んでいた。その購入のためにメソジスト監督教会は、多額の資金援助を送ってきた。実質的には、同教会の牧師であったジョン・F・ガウチャーの寄付によるものであった¹⁴⁾。なお、この土地は実験農場になる前には、伊予西条松平左京大夫の上屋敷であった。官公私立を問わず、明治時代の東京で本格的なキャンパスを構えた学校は、かつて武家屋敷であった土地を利用することが多かったが、東京英和学校もその例に洩れるものではなかった。

こうして美会神学校を合併した東京英学校は青山に移り、一八八三年に東京英和学校と称するようになった。初代総理には日本宣教総理であったマクレイが就任した¹⁵⁾。東京英和学校の誕生は、それまで不安定であった主導権はメソジスト監督教会が実質的に掌握し、立地も青山に本格的なキャンパスを形成することを意味した。もちろん、青山は居留地の外にある一般の市街地であり、そこではメソジスト監督教会自身が経営の責任者を務めることはできなかった。この際もやはり日本人の「校主」を官庁に届け出ている。そこでメソジスト監督教会は、実際には同教会が経営する学校であることを明記した契約を日本人キリスト者らと交わし、ミッションの主導権を確認した¹⁶⁾。

青山の土地購入資金は、メソジスト監督教会が出した

ものであり、東京英和学校の誕生は、それまで主導権の存在が不明確であった状況を解消し、同教会の主導性を確保したという点で画期的であった。もちろんそれまでの耕教学舎や東京英学校も居留地にはなかったが、移転を繰り返さざるをえないなど、その経営は安定を欠いていた。その安定のためにも、メソジスト監督教会によるまとまった資金援助で、安定した学校運営の基礎となり得る校地を手に入れる必要があったのである。

現在、青山という土地は、東京でも有数の「おしゃれな街」として知られるが、こうしたイメージが定着するのは、二〇世紀も半ばを過ぎてからである。明治時代には、まだこの地域は東京の市街地の外れであり、一八八九年に東京市が誕生した時には、東京英和学校のある地区は、市内ではなく豊多摩郡渋谷村に属するような状況であった。実際、当時の東京英和学校は、自らのキャンパスを「高燥」かつ「人家稠密ノ市街ニ隔離」している¹⁷⁾と位置づけているように、環境のよい郊外型のキャンパスであることを売りにしていた。

当時は、地下鉄はおろか、路面電車も開通しておらず、東京の中心部から青山まで通うのは、非常に困難だったはずだ。当時、ほとんどの私立学校が、東京市域内に校舎を構えていたことを考えれば、東京英和学校が青山に開校したのは、非常に「英断」だったともいえ

る。東京英和学校は、一八九四年に校名を青山学院に改めた。

いずれにせよ、外国教会が出資したのにもかかわらず居留地外に設置したということは、日本人の介在が不可欠ということを意味し、その後再び主導権をめぐって摩擦が生じる素地を作った。

② 明治学院と白金

続いて、築地から出て一般の市街地にキャンパスを構えたのが明治学院である。この学校は、アメリカ長老教会、アメリカ・オランダ改革教会、スコットランド長老教会の三つの教派が、共同で設立した東京一致神学校と東京一致英和学校が基になっている。つまり、伝道者養成と一般青少年に対する教育を当初は別々の学校で運営していたのである。ところがミッションは、二つの学校を統合した本格的な教育機関を作ろうと構想するようになった。だが、本格的な学校を構えるには築地は狭すぎた。結局、新たな土地を白金村で購入し、ここに移動して創立されたのが、明治学院であった。その際にも東京英和学校と同じように、日本人が表向き所有者となっていた。¹⁸⁾

ミッション・スクールは築地周辺、私立法律学校が神田周辺にあった。そうした当時の東京の地理感覚からすると、明治学院も限りなく郊外に近い位置にあったと言

える。しかし、青山学院、明治学院のいずれも大名屋敷跡に立地していたことも確かであり、そうした点で、従来からのキャンパスのあり方を踏襲していた。

2、都市化と立教の池袋移転問題

(1) 山手線と池袋

その後、東京では二〇世紀に入ると都市化が進むとともに、従来は大規模な学校があまり立地していなかった山手線の沿線にもキャンパスの立地が進むようになっていた。

現在山手線となっている路線は、一八八五年に日本鉄道品川線として、品川・赤羽間が開業した路線がもととなっている。当初は、東海道線方面と東北線（日本鉄道線）方面を連絡するために建設された路線であった。東京の市街地をめぐる環状線となっている現在とは異なり、武蔵野を走る蒸気鉄道だった。つまり現在とは異なり、東京の郊外の農村を走る路線だったのである。途中駅として目黒・渋谷・新宿・目白・板橋が置かれた。基本的に近世からの街道と交差する場所に駅が置かれたことがわかる。

学習院は、四ツ谷に校地を置いていたが、一八九四年に発生した地震を契機として、その移転が検討されるよ

うになった。すでに市区改正事業や鉄道の敷設が進み始めており、周辺の環境が悪化することが予想されたからである。移転先としては、大森や小田原なども検討されたが、一八九七年に北豊島郡高田村大字高田付近の民有地を買収して移転することを決めた。その後財政上の問題などで移転事業は一時中止されたが、一九〇七年に新校地への移転を完了した¹⁹⁾。

この土地は、山手線の目白駅の駅前だったが、移転を決めた当時はまだ汽車が数時間に一度発着する程度状況であり、山手線に都市交通機関としての役割はまったくなかった。だが、その後東京の都市化が進んだこともあって、日露戦後には山手線の電化が構想されるようになっていた。このころは、新宿や渋谷といった山手線沿線の地域が、東京郊外の地域としての位置づけを強めていたのである。そうした意味で学習院の目白校地は、二〇世紀の東京におけるキャンパスの郊外移転のあり方を示す嚆矢であったともいえる。

また、すでに触れたように、従来の大規模学校敷地の多くは、大名屋敷をはじめとする武家地に立地していた。しかし学習院の目白校地はこうしたままとまった土地ではなく、一般の民有地を買収したものであり、キャンパスの立地の仕方が大きく変化してきたことを示している。

立教でも、こうした状況を背景にキャンパスの移転が構想されていくことになった。立教では、一九〇七年には立教大学を設立するなど、高等教育に力を入れるようになっていた。ところが、その際大きな問題となったのが、設備の貧弱さであった²⁰⁾。

築地時代に立教大学に入学した松下正寿が後に回想しているように、当時は築地の立教中学校の一角に実質的に間借りしているようなもので、立教中学校の「附属」に近いのが実態であった²¹⁾。実際、当時の母教会への報告書でも「異教徒の帝国の首都にある聖公会の聖職者集団の本拠地であることを考えると、みすばらしく情けない²²⁾」と評されるような有様であった。

もちろん、こうした状況は総理であるヘンリー・S・タッカーはやくから認識していた。大学開設の翌年には、すでに教室が足りなくなっていることを指摘した上で、大学の移転の必要性について触れている。

私はこの件について考えれば考えるほど、教育事業の恒久性に鑑みて、大学を現在の敷地から移転すべきだという確信を強めています²³⁾。

もちろん、タッカーも当面の状況を乗り切るだけなら、築地でも何とか対処できると考えていた。だが「大学の名に値するものを維持することは到底不可能²⁴⁾」であり、「私たちはもつと遠く未来を見るべきだ²⁵⁾」として、

長期的な視野に立てば、移転による設備の充実は不可避の課題と認識していたのである。

確かに築地は東京市の中心部に近く、学生や生徒を集めやすい場所ではあった。しかし、総面積二千坪に過ぎない校地に、大学と中学校が同居していたため、設備の狭隘が問題視されるようになっていた²⁸⁵。一九一三年には「わずかに二五〇人用の建物に七〇〇人の学生が詰め込まれ²⁸⁶」るような状況となっていたのである。

当時立教中学校の生徒の多くは京橋、日本橋、深川、芝といった当時の市内中心部に近い地域から通学していた。そこで当面は中学校を築地に残し、大学のみ新たに池袋に用地を取得して移転することを構想した²⁸⁷。当時の立教中学校の生徒の多くは日本橋区と京橋区から通学しており、郊外への移転により多くの生徒を失うことを恐れたからだ²⁸⁸。結果的に中等教育と高等教育の空間的分離が想定されていたのである。

もちろんこれは、立教中学校が日本橋や京橋という商業中心地に近いという利便性の問題と、それに付随して将来さらに土地が値上がりすれば、その時点で築地キャンパスを売却し、その利益で池袋キャンパスの拡充に充てることができるという目論見が背景にあった²⁸⁹。

池袋キャンパスの整備費用としてタッカーは、さしあたり二十万ドルが必要になることを指摘している。彼が

こうした大きな投資をして立教大学の移転と設備の拡充を推し進める背景には、最終的な目標である日本のキリスト教化のためには、聖公会独自の高等教育機関の整備が必要との認識があった²⁹⁰。さらに、アメリカ聖公会がアジア伝道の要が日本にあると認識している以上、さらにその要となる立教学院の整備は、日露戦争における旅順の戦いにも等しい、と極めて重要な位置づけを与えていたのである²⁹¹。

問題視されていたのは、設備だけではなかった。そこで展開している「大学」教育についても危惧される状況にあった。二〇世紀にはいると、立教だけではなく、各キリスト教学校では高等教育部門を拡充し、大学設立をめぐすようになっていた。そうした中で、プロテスタント系の主要学校が協力してキリスト教連合大学を創立する構想も具体化していた。

立教がキリスト教大学へどのような関係を持つとしても、設備内容ともに大学の拡充を図ることは不可欠であった。当初は、築地で隣接地などを買収して拡張するということも一つの方策として検討されたが、結局「東京市に近接せる閑静の地をト」した郊外への移転を目論むようになった²⁹²。

新キャンパスには、定員三百名を想定した校舎、寄宿舎、聖堂、会堂、図書館、標本室、体育館を建設し、野

球やテニス、サッカーなどでもできる運動場を設置することも予定していた。そのためには二万から三万坪の敷地を確保することが必要だと考えていたのである⁸³⁾。

このため新キャンパスの建設には莫大な資金が必要であった。タツカーの計算によれば、土地購入に九万五千ドル、校舎やチャペルなどの建物建設に十萬ドル、その他の諸費用に五千ドルの計二十萬ドルを当面必要な資金としていた⁸⁴⁾。なおこれは当時のレートで日本円に換算して約四十萬円となる。そこでタツカー本人が、一九〇八年一月から一九〇九年六月までアメリカに赴き、現地で資金募集を行った⁸⁵⁾。

こうしたタツカーらの熱心な運動により、フィラデルフィアでは婦人海外伝道補助局のメンバーが中心となり「立教大学資金募集委員」が設置されるなど募金活動は活発化し⁸⁶⁾、約十萬円の寄付を集めることに成功した⁸⁷⁾。さらに建築資金を募集するため⁸⁸⁾、一九一〇年八月には、ジョン・マキムと元田作の進も渡米して募金活動を展開した⁸⁹⁾。いずれにせよ、新キャンパス建設の資金は、アメリカでの募金に頼ることを前提としていたのである。実は当初移転先として想定されていたのは、「都市の西端」、つまり東京の西郊方面だったようだ。具体的な地名は明らかではないが、「複数の鉄道と電車の路線が集まる地点の近く」だったとされ、新宿がその有力な候

補として想定できる。特に「現在建設中の電車路線が完成したら」、地価の大幅な高騰が期待できるとして、早く購入しておく必要があるとタツカーは考えていた⁹⁰⁾。だが理由は不明だが、その後この西郊の土地は候補から外れ、代わって浮上してきたのが池袋という土地であった⁹¹⁾。

池袋といえは、現在は新宿、渋谷と並ぶ山手線沿線の副都心と位置づけられた、都内でも屈指のターミナルとして知られている。しかし、新宿が甲州街道、渋谷が大山街道沿いに位置し、近世からそれなりに町場として栄えていたのに対し、池袋は純然たる武蔵野の農村だった。

すでに触れたように、山手線は一八八五年に日本鉄道が品川と赤羽との間に開通させた品川線がもとになっていたが、その初期に駅が置かれたのは、目黒、渋谷、新宿、目白、板橋に過ぎなかった。これらの駅の多くは、近世以来の街道との交差点に池袋に駅を置くことは、検討すらされなかったのである。

その後、池袋は次第に都市化の波に飲み込まれていくことになったが、その過程で大きな画期は三つあった。

一つ目は、池袋駅の設置である。日本鉄道品川線は、品川と赤羽を結ぶ路線だったが、二〇世紀に入り、日本鉄道海岸線（現・常磐線）との連絡を図るため、田端へ

の支線を敷設することになった。その際支線との分岐点に設置したのが池袋駅であった。一九〇三年のことである。⁴³⁾

二つ目は、豊島師範学校の誘致に成功したことである。

一九〇七年、東京府は二番目の府立師範学校の設立を構想したが、その設置場所は各地の誘致合戦を経て、一九〇八年に池袋に決まった。池袋駅が開設されていたということから、郊外でありながら交通便利で、しかも風紀上問題のない地域ということで選ばれたのである。⁴⁴⁾

豊島師範学校の開設で、郊外にありながら交通至便で環境にも優れているとして、成蹊実務学校など、他の学校も池袋に学校を設置するようになった。⁴⁴⁾ 郊外の文教地区としての性格を持ち始めたのである。

そして三つ目が山手線の電車運転が開始されたことである。先ほども触れたように、現在の山手線は、もともと私鉄である日本鉄道が敷設した路線だったが、現在とは異なり武蔵野の台地上の農村の間を縫って走る路線であり、都市鉄道としての性格は当初まったくなかった。だが明治時代も末期となり、渋谷や新宿といった当時の東京の郊外部にまで都市化が進んでくるようになると、日本鉄道を買収した国有鉄道は一九〇九年にこの路線を電化して電車を走らせるようになった。当時の山手線は現在のような環状線ではなく、新宿から品川を経て上野

に至る路線であったが、電車が運行するようになったことで池袋は都心部への有力なアクセスを手に入れるようになったのである。

(2) 池袋での土地買収

こうして池袋は、一九一〇年代に入ると本格的に発展を始めるようになったが、依然として東京の既成市街地とは離れた郊外の地域に属していた。さらに立教大学が移転してくるようになった池袋駅の西側は、池袋地区の中でもさらに辺鄙なところに位置していた。

実は、もともとの池袋の集落は、池袋駅よりも一キロメートルほど北にあり、南側の目白の集落とも離れていたこともあった。この二つの集落の間にあるということもあり、とりわけさびしいところであった。

立教大学と同じ池袋駅の西側にキャンパスを設置した豊島師範学校の関係者は、当時の池袋駅周辺の様子を次のように回想している。

「一面の菜畑・野菜畑であつて、見渡す限り広々と、遠く落合・長崎まで拡がって居りました」

「一面の畑や草原で、処々に檜の木の林があつて、太陽は文字通り、草から出て草に入っていました」

「練馬大根の産地で、秋はおおかた大根畑で道路はさわめて悪く、日曜以外の外出は困難⁴⁵⁾」

当時は、あたり一面に畑や草地が広がる農村地域だったことがよくわかる。さらに開設当初の池袋駅は、現在の東口側に駅舎があり、西口はまだ開設されていなかった。池袋駅の西側に出る場合には、いったん東口の駅舎を出て「約一町たらずも歩行し、見上げるような線路の上に、架したる、高く且長きしかも雨ざらしの橋を渡」らなければならなかったという⁽⁴⁶⁾。池袋の中でも、現在の西口方面はとりわけ交通の便が悪かったのである。前向きに評価すれば、敷地が狭い築地とは異なり、今後大きな発展が期待できる場所であった。

タツカーら、当時の立教幹部が池袋を選んだ直接の理由はよくわかっていないが、これまで述べてきたように、客観的に見れば「市附近の地所にして将来の発展を予期し得き所⁽⁴⁷⁾」という当初からの思惑にまさに沿った場所だった。いづれにせよアメリカ聖公会は、タツカーがアメリカで募金してきたを資金などを元手として、一九一〇年一月に当時東京市外であった池袋に一万七千坪の校地を購入した⁽⁴⁸⁾。

すでに触れたように、東京に古くからある大学の敷地は、かつて大名屋敷だったところが少なくないが、郊外で、しかも従来は純然たる農村であった池袋では、こうしたまとまった土地は基本的に存在せず、一般の畑地をそれぞれの地主から個別に購入するという方法をとらざ

るを得なかった。

立教大学の予定地として選定されたのは、「北豊島郡巢鴨村大字池袋字中原」附近の約一万七千坪である。池袋地域の中でも、この字中原附近の地所に決定した直接の理由は定かではない。しかし、すでに目白や池袋の集落の附近には、はやくから人家がそれなりに建ち並んでいた上に、池袋駅に近い地域もすでに豊島師範学校や成蹊実務学校など、他の学校のキャンパスとして押さえられていた。当時の地図を見ると、池袋から比較的近い場所にまとまった校地を確保できる数少ない場所だったことがわかる⁽⁴⁹⁾。

地主から実際の買い取りにあたったのが、当時日本聖公会の会計責任者だった多川幾造と、前東北学院院長であり当時代議士を務めていた押川方義^{おしかわまさむね}だった。

現在残されている「土地譲渡承諾書」によると、土地のほとんどは畑地で、坪四円五〇銭で購入している。地主の多くは村内ないしは近隣の地主で、不在地主は少ない。個々の地主との交渉がどのような経緯で行われたのかはわからないが、多川が二一名の地主から約三二反・四万三千円、押川が二一名の地主から約四二反・五万七千円で交渉をまとめている。合計すると十万円あまりとなるが、全体のうち押川が六割近くの土地を買い取っている⁽⁵⁰⁾。

一九一二年当時、一坪四円五十銭であった立教大学付近の地価は、約十年後の一九二一年には、坪当たり二七円前後にまで高騰している⁵¹⁾ので、土地の値上がりを見越して早い目に校地を購入しておくべきという、タッカーの予想は当たったことになる。

アメリカ聖公会のミッシヨン・スクールである立教大学の事業に、日本聖公会の教役者であった多川はともかく、アメリカ・ドイツ改革教会系のミッシヨン・スクールのトップを務めた押川の名前が登場するのは、奇異にも思える。

どうやら押川が登場することになったのは、用地買収の困難があったようだ。土地の値上がりを予想したのはタッカーだけでなく、地主たちも同様だった。そこで、立教大学校長だった元田作之進が押川に土地買収の仲介を依頼しようだ⁵²⁾。

元田と押川は、所属する教派こそ違っているが、当時の日本のプロテスタントの指導者は、毎年夏に開催されるYMCAの夏期学校への参加などを通じて、他教派の人々とも頻繁に交わりを持っていた。

押川は、日本のキリスト教界の指導者には珍しく、鉾山採掘、米の売買、塩の取引など、さまざまな営利事業に携わっていた。それは自らの利害のためというよりは、外国教会の援助に頼らずに、日本人が自立した伝道活動

を展開するための資金作りという、キリスト教活動への信念が背景となっていた⁵³⁾。

この前後の新聞報道によると、このころ押川は、当時進んでいたカトリックの大学設立に際しても、土地購入を仲介するなど、東京の郊外での土地取引を手がけていたようだ⁵⁴⁾。元田が押川を頼ったのも、こうした実績が影響していたことが推察される。だが、買収交渉はかなり難航したようだ。そうした困難に見舞われつつも、一九一〇年一月の末までに地主との買収交渉は妥結し、立教大学は新たな土地を得ることに成功したのである。

購入直後の一九一〇年四月七日、タッカーは実家に宛てた手紙の中で「東南の端に面して大学本館を置き、反対側に中学校を置く。その間の敷地に寄宿舎、チャペル、教員住宅、それから運動場を設けるつもりです⁵⁵⁾」と、キャンパスについて自らの基本構想を記している。だが、後で詳述するように、この敷地に実際に校舎が建ったのは、購入から十年近くを経た一九一八年になってからのことであった。

立教大学のキャンパスが、池袋に置かれることが決まったことで、大きな影響を受けたのが聖公会神学院であった。日本聖公会では、従来アメリカ系、イギリス系のミッシヨンごとにそれぞれ別個の神学校で教役者を養成してきたが、統一的な中央神学校の必要性が認められ

るようになってきた。そこでアメリカ系、イギリス系の神学校を統合して聖公会神学院が創立されることになったのである⁵⁶⁾。

東京におけるアメリカ聖公会系の神学校である三一神学校は築地にあり、従来から立教とは密接な関係を持っていた。こうした経緯をふまれば、立教の近くにあることが望ましかったことは明らかだ。実際、当時の立教学院総理タツカーも「新しい神学校は立教学院の学生に全面的に依存することになる⁵⁷⁾」と報告しているように、聖公会神学院は立教大学の存在を前提にしていた。

一九一二年に聖公会神学院は、池袋の立教大学の予定地の向かい側に六千坪の敷地を購入し⁵⁸⁾、九月には移転した⁵⁹⁾。この時点では校舎は建設中だったが、翌年にかけて完成していった⁶⁰⁾。神学院の建物は木造だったが、チューダー・ゴシック様式による校舎のほか、寄宿舎、教職員住宅を備えた本格的なキャンパスであった⁶¹⁾。

聖公会の教役者をめざす神学生は、まず立教大学を卒業し、その上で聖公会神学院に入学するというコースをとるのが原則となるなど、聖公会神学院は、池袋に移転してきた立教大学と密接な関係を持って運営されるようになるが⁶²⁾、実は最初から立教大学との関係を前提に学校の位置が決められていたのである。

さて、聖公会神学院が建設されるのに際して、東京府

当局からついた注文は、水を飲用する場合は濾過者沸してから利用すること、というものであった⁶³⁾。当時の池袋は水道といった基本的な都市インフラすら未整備の郊外の土地だったのである。

このように、当時の池袋は東京の完全な郊外地域であり、山手線の電車こそ開通していたものの、水道や道路といった基本的なインフラすらまだ整っていないかったのである。土地購入こそ早かったものの、実際に池袋キャンパスの建設工事が進み、築地からの移転を完了するまでには、時間を要したが、一九一八年秋には池袋キャンパスでの授業を開始し、翌年五月には落成式を実施した。

4、私鉄と郊外移転問題

(1) 私鉄経営とキャンパス誘致

立教大学が池袋キャンパスの建設に手間どっている間にも池袋の都市化は進んだ。とりわけ東上鉄道（一九一四年開業）と武蔵野鉄道（一九一五年開業）という二つの私鉄の起点となったことも見逃すことができない。都心部への利便性に加えて、二つの路線の始発駅となることで、池袋にターミナルとしての性格が加わったのである。二つの私鉄は、関東大震災の前後に相次いで電化さ

れ、郊外の開発が進むようになった。こうして池袋は、郊外と都心部とをつなぐ結節点として、大きく発展していくようになっていったのである。

こうした私鉄は、電鉄の利用客の増加を図るために、郊外に住宅地や遊園地を開発することが経営の大きな柱となっていたが、それと並んで重視していたのが、沿線への学校の誘致であった。

とりわけ関東大震災で東京市内の多くの学校が被害を受けたことで、郊外への移転を進めた。キャンパスの郊外への移転は、従来の校地を売却し、その売却で郊外に充実したキャンパスを建設するという学校側の思惑もあったが、私鉄側も用地を寄付するなどして、積極的に学校を誘致したのである。

その中でも五島慶太が率いる東横電鉄や目黒蒲田電鉄は、慶應義塾大学予科や東京高等工業学校を沿線に誘致するなど、とりわけ熱心に沿線への学校の誘致を進めていた。

五島慶太は、沿線に学校を誘致することの電鉄側のメリットを次のように説明している。

学校移転に私が全力を傾注致しました最大原因は、学校が移転した後に会社は一文の営業費も要らないと云ふことであります。遊園地を経営して一時的の旅客を吸収しても長く其旅客を継続せしめようとす

れば、常に趣好を変へて行くこと、及び日々の管理保存に莫大の経費を要しまして、なかなか耐へ切れませぬ。そこで最初に於て多少の建設費を寄附致し、まして、営業費の不要と云ふことが会社に取りましては、何よりの利益であります⁶⁴。

私鉄の沿線開発の方法としては、住宅地や遊園地の開発が一般的だったが、これらはリスクも少なくなかった。特に遊園地は営業費がかかる割には、業績の振れ幅が大きく経営的には不安定なものであった。

それに対し、学校は仮に私鉄側が建設費や土地を寄付したとしても、できたその日から営業努力せずとも、学生や教職員が毎日安定的に利用してくれるという点で、「おいしい」存在であった。

すで見たとように、ターミナル化が進んでいたとはいえ、池袋はまだ発展途上の街であり、関東大震災後においても立教大学の郊外への移転は問題とはならなかった。むしろ、震災前には築地にあった立教中学校が震災後に池袋キャンパスへ移転してくるなど、依然として郊外のキャンパスとしての色彩が強かったのである。

(2) 関東大震災後における青山学院のキャンパス問題

一方で、同じ山手線沿線でも都市化が先行していた渋谷周辺では、キャンパスのさらなる郊外への移転は現実

の問題として認識されるようになっていた。

すでに見たように、青山・渋谷という地域も明治時代には市街地から離れた郊外であったが、大正時代を通じてその姿は大きく変容してゆく。

それまで代々木練兵場であった土地には、明治天皇を祭神とする明治神宮が創建され、その参詣のための道として表参道が開鑿された。その沿道には同潤会青山アパートが建設されるなど、都市化が急速に進んだ。渋谷には山手線のほか、現在の東急東横線である東横電鉄が開業するなど、ターミナル化、繁華街化が進んだ。

こうして明治時代には東京の郊外にあった青山キャンパスは、次第に東京の市街地の中に取り込まれていくこととなった。こういった状況の中、青山学院は女学院と合同し、代官山の土地を手放すなどして学生が増え、次第にその校地に不足を感じるようになっていた。そこで青山学院としても新たに郊外に土地を取得して、さらに大規模な学校へと展開を遂げていくという志向が次第に強くなっていった。学生の間からも郊外への展開を求める声が高まっていた。⁶⁵⁾

当時高等商業学部長であった古坂崑城は、とりあえず郊外に運動場だけでも移転するため、当時渋谷から吉祥寺に向けて路線を建設中であった帝都電鉄、現在の京王井の頭線の沿線に目をつけた。彼はのちにその経緯を次

のように回想している。

青山学院の学生が、漸次増加して運動場の狭隘を感ぜざるようになって、郊外運動場の必要が叫ばれ、私達教授連が郊外の土地を物色して歩いたことがありました。丁度、帝都電鉄の井之頭線が鉄道敷設中の頃のことです。電鉄会社の主要な地位にある人で土地係の人から、永福町の近くに某銀行の担保に入っている広い土地があるが、一坪六円で一万坪ばかり購入してはどうか、もし希望なら世話してあげようとの話がありました。それで私はこれを学院の理事会に提案して詳しく説明したところ、故人⁶⁶⁾はこれに反対されました。私は一坪六円は決して不当な値段ではないことと、電車が開通するようになれば、学生の往復も楽になるし、土地は値上がりして学院にとっては結局利益となるであろうと力説したのであります。そうすると故人は申されました。「教育者が土地の値上りなどを期待するスベキキューレシヨンのようなことをやるのは面白くないですな」と⁶⁷⁾。

古坂の考え方は、先ほどの私鉄による思惑とは逆の立場からのアプローチであるが、郊外において開発の利益を得るといふ点では一致している。ところが校友会長・理事として、学院の財政に対して大きな発言力をもって

いた米山梅吉はこれに難色を示し、この話は立ち消えになったのであった。三井信託社長であった米山は、子息の一人が立教大学に通っていたことから、心理学研究室の建設資金を寄付したことで立教では知られているが、青山学院では、校友会長および青山学院財団法人理事として、その経営に大きな影響力を持っていた。米山は、この時点での青山キャンパスからさらなる郊外への移転を退け、現位置での学校の経営を選択したのであった。

(3) 関西学院の西宮移転と小林二三

一方、この時期にはキリスト教学校の中にも、キャンパスを郊外へと移転することで、学校の規模を拡大し、大学への昇格も果たす学校も出現した。関西学院である。関西学院は、南メソジスト監督教会が一八八四年に神戸に創設したミツシオン・スクールだった。

開港以降、神戸には居留地が置かれていたが、ミツシオン・スクールを設置する場所として選んだのは、居留地ではなく、当時は神戸の東北の町はずれにあった原田の森であった。ここに約一万坪の土地を購入し、そこにキャンパスを開設している。当時はまだ、居留地の外に外国人が土地を所有したりすることはできず、日本人の名義を借りるしかなかったが、すでに神戸の居留地やその周囲の雑居地は完全に市街地になっていたことに加

えて、今後神戸の市街地が東へと発展していくとの見通しから、あえて不便なこの土地を選んだのだった⁶⁸⁾。一九一〇年代に入ると関西学院でも大学設立を構想するようになっていたが、大学令が制定され、同志社が大学に昇格すると、関西学院でもにわかに大学設立に向けた動きが活発化した。

関西学院は、当初、南メソジスト監督教会が単独で経営していたが、一九一〇年にカナダメソジスト教会が経営に参加し、二つの教会による共同経営となっていた。カナダメソジストは、訓令十二号問題の際に東洋英和學校を廃止した後、男子のミツシオン・スクールを持っていなかったのである。これ以降、関西学院の経営に関する重要事項は、二つのメソジスト教会によって構成される連合教育委員会が担うことになっていた。連合教育委員会は関西学院による動きを承認し、大学の設立がいったんは決まった。ところが、その後同委員会は、財政上の理由から大学化の延期方針を決定した⁶⁹⁾。つまり、関西学院の大学昇格のための資金援助はできないということとを伝えてきたのである。

外国からの援助が期待できないことが明らかとなった。関西学院では、他の方法を模索せざるを得なくなった。だが、母教会からの援助が期待できない以上、大学実現の目処が立たない状況が続いていたのである。

膠着状態を打開するきっかけを作ったのが、河鱒かばなまを節という人物だった。河鱒はオレゴン大学で学んだ後、山下汽船に勤務していたが、病気のため退職し関西学院の近くで療養生活を送っていた⁷⁰。

河鱒は、たまたま近所に住んでいた関西学院高等商業学部教授菊池七郎から事情を聞き、「現在の敷地を高く売って、安価の郊外の地に移転」することを薦めるとともに、購入者として阪神急行電鉄専務の名を挙げた。その上、小林との交渉役まで買って出たのである⁷¹。つまり、原田の校地を売却して郊外に移転し、大学昇格の資金を捻出するというアイデアであった。

河鱒はそれまで関西学院とは何の関わりもなかったが、その登場によって関西学院の移転と大学昇格が、実際に向けて大きく動き始めた。河鱒らは小林と交渉し、最終的に原田校地の買い取りと移転敷地の提供を承認させたのである⁷²。移転先に選ばれたのは、兵庫県武庫郡甲東村上ヶ原付近（現・西宮市）の丘陵地であった。

この時期に関西学院の郊外移転が浮上してきた背景には、大学昇格問題だけでなく、当時の神戸における都市問題の展開があった。一八八〇年代に関西学院が創立された当初は、原田の森は神戸市街地から外れた全くの郊外であったが、都市化が進行してきたこの時期には、すでに神戸市街地に取り込まれつつあった。そのため当初

は閑静であった環境も悪化していた。さらに都市化の影響で、原田校地の敷地内が都市計画道路の予定地ともなっていた。その一方で、原田は阪神急行電鉄のターミナル駅が近くに設けられたこともあって、一九二〇年代に入ると地価が高騰するようになっていた⁷³。こうしたいくつかの要因から郊外への移転が具体化し始めたのである。

最終的に関西学院は、母教会からの援助をあきらめ、当時この地域での開発を積極的に展開していた鉄道企業に頼ることにした。河鱒と同じく小林も関西学院の卒業生ではなく、それまで関西学院とは特に関係を持っていなかった。だが、沿線に学校を誘致することはイメージアップにつながるばかりでなく、安定的な乗客の増加を見込めることから、鉄道会社にとってもうまみのある話であった。

特に、移転先となった上ヶ原は、一九二二年に開通した阪急今津線の沿線に位置しており、会社としては沿線開発を積極的に展開し始めていた時期にあたっていた。そうした状況の下、関西学院を神戸から誘致してくることは、阪急にとっても大いに利益のあることだった。

とはいえ、上ヶ原への移転がすんなり決まったわけではない。実際、移転事業を推進した菊池七郎も次のように回想している。

中学部と云い、中央講堂と云い、赤煉瓦の立派な竣工した計りの校舎の立ち並んで居る有様は、神戸市の一偉観であり、市民の誇りの一つであった。仮令大学昇格、資金獲得の爲めとは云へ、之れ等を手放すが如きは愚の骨頂と考へられても無理ではなかつた⁽⁷⁴⁾。

明治以来拠点を構え、中央講堂など竣工後わずか数年しかたっていない建物が建ち並んでいる原田を放棄することは相思い切った決断であつた。

また、大学昇格等の問題を考慮すると移転せざるを得ないとしても、すでに市街地化が進んでいた神戸市内の原田に比べて、上ヶ原はまだ開発が始まつたばかりの郊外であり、特に中学部を中心に移転へ慎重な意見も出ていた。

移転するとしても、上ヶ原が最初からの前提だったわけではなく、西は明石から東は京都付近までの多くの候補地が挙がった。特に神戸市街地からより近い六甲台は、最後まで有力な候補として検討されていた⁽⁷⁵⁾。

こうした論争に決着をつける上で大きな役割を実質的に果たしたのが、六甲台では原田の旧校地を購入する意思がないとした小林一三の意向であつた⁽⁷⁶⁾。神戸の市街地に近く、阪神電鉄などライバル路線との競合もある六甲台とは異なり、当時路線を開通させたばかりで、積極

的に開発を展開していた今津線沿線の上ヶ原のほうが小林にとって魅力的だったのだ。結局、関西学院は原田校地を売却し、小林から寄付された上ヶ原の校地に全面的に移転することになった。

この時、関西学院は新校地七万坪を五五万坪で阪急電鉄から購入したが、同時に三三〇万円で原田旧校地を阪急電鉄に譲渡しているので、多額の差益を得たことになる⁽⁷⁷⁾。これをもとにヴォーリズによる全体計画に基づくキャンパスを整備し、一九三二年に大学昇格を果たしたのであつた。

4、戦後立教における新座移転問題

一九二〇年代以降、大都市の多くの学校でキャンパスの郊外への移転が活発化し、キリスト教学校でもそうした流れに乗る学校が出てきていた。すでに見たように、戦前においては池袋キャンパスの移転やその他のキャンパスの新設が具体的な課題となることはなかつた。また、戦災で焼失した聖公会神学院の跡地などを池袋キャンパスに編入するなど、少しずつ校地面積も拡大していた。

しかし、一九五六年に文部省が省令として「大学設置基準」を制定し、学生一人あたりに対しての校地面積の

基準を明確に定めると、大都市に立地する多くの私立大学では、その対応に迫られるようになった。これらの大学の多くは都心部の狭いキャンパスに立地し、基準を下回ることが少なくなかったからである。さらに一九五九年にはいわゆる「工場等制限法」が制定されると、事実上その移転先は東京都二三区外に限られるようになった。結果として見れば、この二つの法制度は二〇世紀後半の東京における大学の郊外移転を方向づけることになった。

例えば、中央大学は一九五七年から新校地の選定に着手し、その用地として東京都南多摩郡由木村に一九六〇年以降、三次にわたり計一二万坪を買収した⁷⁸⁾。法政大学も一九六四年から六七年の間に、東京都町田市に六〇万平方メートル以上の校地を購入し、移転を計画するようになっていた⁷⁹⁾。

立教大学では、一九五五年に松下正寿が総長に就任すると、大学の規模拡大の方針を打ち出していた⁸⁰⁾。実際に社会学部や法学部を設置したのははじめ、数千人規模であった立教大学の学生数を一万人を超える規模まで拡大することをめざしていた⁸⁰⁾。

だが、こうした構想を実現するためには池袋だけでは、行き詰まりを感じるようになっていたことも確かであった⁸¹⁾。こうした状況に風穴を開けたのが、立教高等

学校の移転構想であった。

一九四八年に新制の高等学校として発足した立教高校は、池袋キャンパスに校舎を置いていたが、初期のころから郊外への移転を望んでいた。とりわけ一九五三年に主事となった縣康は、「生徒に浩然の気を養い、勉学に夢を持たせ」るためには、郊外への移転が不可欠として、学院当局に強く訴えていた⁸²⁾。縣は「小学校から大学まで十六年間も同じ所に通わせるよりも、たとえ三年間でも広大な自然に親しみ、伸びのびとからだを鍛え、ものを考える時を与えたい⁸³⁾」、つまり、広々とした郊外という空間で学ぶことこそが、教育にとって重要だと考えていたのである。

しかし、佐々木順三院長・総長時代には、「高校が池袋を離れると建学の精神を逸脱し、世俗化してしまう」として、その構想が受け入れられることはなかった⁸⁴⁾。当時の立教学院の首脳部は、「貫教育の充実のためには、同じ空間で教育することが重要だと見ていたのである。ところが、松下が院長・総長に就任すると、こうした状況は一変した。松下は縣に対し、高校の郊外への移転に積極的な姿勢を示した⁸⁵⁾。松下の意向を受けた縣は、清瀬、新座、朝霞といった地域を中心に具体的な移転先を探すようになった。こうした活動を展開する中で、東武鉄道が用地取得に対し前向きであるとの情報を得たよ

うだ⁸⁶⁾。

東上線は、戦前は常盤台など一部を除くほか、相対的に沿線の開発は遅れていた。東武鉄道は東上線の輸送力を強化するとともに沿線開発を推進し、池袋に東武百貨店を開業するなど、東上線沿線の「繁栄策」に力を注ぎつつあった⁸⁷⁾。

こうして、一九五六年末には東武鉄道および立教学院の幹部が会談を持ち、東武鉄道から東上線の沿線に校地を寄附する方向で話がまとまった。その過程で東武鉄道は高校だけでなく大学の移転を条件とする意向を示した⁸⁸⁾。

こうして一九五八年一月二十九日、立教学院と東武鉄道は「立教学院校舎移転に関する協定書」を締結し、高等学校と大学の一般教育部を新座に移転し、そのための建設資金を東武鉄道が寄附するという協定を結んだ⁸⁹⁾。

このように、新座への移転構想の中に大学が含まれるようになった直接のきっかけは、東武鉄道の意向が大きかったことは確かだ。しかしこれまで見てきたように、松下総長就任後の立教大学が拡大路線を進める中で、松下が高校側の構想を拾い上げ、換骨奪胎する形で、新座へのキャンパス移転構想を具体化していったという面があったことを見逃すことはできない。

実際、松下は「池袋はもう行き詰まりですよ。そこで

ね何とかしなければならぬと思っておったところだ。そこへ東武電鉄(鉄道)株式会社の根津嘉一郎社長が立教の発展のために寄附しようかという話になった⁹⁰⁾」といったように、東武鉄道の申し出がある前から池袋からの移転構想を温めていたことを認めている。

さらに松下は「とにかく立教大学は東京都だけでは狭すぎるよ。東京都から埼玉県、神奈川県の一都二県にわたらなければだめなんですよ⁹¹⁾」などと、より広域での展開を含めた拡張方針をたびたび表明していた。実際、松下総長のもとでは、群馬県妙義山麓や北海道滝川市へのキャンパス設置さえ具体的に取りざたされたのである⁹²⁾。

立教高校の設計を担った建築家アントニン・レーモンドは、その際に意識したこととして次のように述べている。

この高校の直接の課題は、将来の非常に大規模な大学の一部とすることであった。またそれは立教という家族の中にあつて、しかも施設は一部か、またはまったく共有することなく、高校からはつきり分離して確保することであった⁹³⁾。

レーモンドが担当したのは、直接的には高校のキャンパスであったが、実際には大学の移転を前提に、高校から大学が一貫したキャンパスで教育がなされることを重

視して設計していたのである。

だが、大学の新座移転はなかなか具体化することはなかった。その要因はいくつもあるだろうが、拡大路線を推進していた松下が総長を辞職したことに加え、その後大学紛争に巻き込まれていったことが大きく影響していたことは確かだろう。

結局、新座キャンパスが当初「一学部一日利用」という形で設置されたのは、一九九〇年となり、移転構想が浮上してから三十年以上の時がたっていた。キャンパスの開設までに長い年月が必要となった要因とその経緯については、今後の課題とせざるを得ない。だが、その間に中央大学や青山学院大学はじめ、多くの大学が郊外へのキャンパス移転を行なうようになっていた。そうした中で、立教大学が池袋キャンパスのみで教育研究を展開してきたことは、大学の内容や位置づけを大きく特徴づける影響をもたらしたことは否定できないだろう。一方、立教高校のみが新座での教育を長く続けたことも、立教学院全体における教育体系の中に大きな影響があったことも想像に難くないだろう。

おわりに

本稿では、東京の都市化とキリスト教学校の動向の中

で、立教のキャンパスの変遷を、その立地を中心に概観してきた。

当初、居留地とその周辺に立地していたミッション・スクールは、次第に東京の一般の市街地に移転していった。青山学院や明治学院はその早い例だが、いずれもかつての大名屋敷を利用していったように、都市化との関係でいえば、同時期の他の主要な官公私立学校のキャンパスと同じような段階にあった。

だが一般の学校とは異なり、当時の外国の教会が設立したミッション・スクールにとつて、居留地から出て一般の市街地にキャンパスを構えることは、大きなリスクを伴うことでもあった。アメリカ聖公会のミッション・スクールであった立教は、この段階では移転せず、築地居留地に留まり続けるという選択をした。その直接的な理由は現段階では明らかではないが、相対的に母教会の主導性が強かったという当時の立教の性格を反映したものと考えることもできる。

二〇世紀に入り東京の都市化が進むと、まず山手線沿線での市街地化が進み、その沿線への各学校のキャンパスの移転が進むようになった。この時期の新キャンパスは、従来とは異なり、旧武家屋敷のようにまとまった敷地を利用せず、田畑のような一般の土地を利用することが増えていった。そうした意味で、この時期のキャンパ

スの移転は、それまで市街地となっていない、郊外への移転という性格が濃くなっていた。池袋への移転を決めた立教大学の敷地も、一括した敷地ではなく、数十人規模の地主が所有する一般の田畑を買収しており、当時の池袋の郊外的な性格をうかがうことができる。

一九二〇年代になると、私鉄の経営戦略のひとつとして、沿線に学校のキャンパスを誘致することが増加した。関西学院のように、キリスト教学校の中にもこうした路線に乗る形で、移転と発展を図る学校が出てくるようになった。池袋は、この時期に都市化が進んだが、関東大震災後に築地から中学校が移転してきたように、まだ発展途上の街であり、郊外への移転が具体的な問題となるようなことはなかった。

一九五〇年代半ば以降、立教大学は松下正寿院長・総長の拡大路線のもと、学部や学生数の増加を図っていた。一方、文部省は大学設置基準を定め、キャンパスに収容する学生数の規制を強化していた。こうした中、都心部にある主要な私立大学の中には、郊外に土地を購入し、郊外への移転を構想するところも出てきた。

一方、立教高等学校は独自に郊外への移転を構想していたが、松下院長のもとで、東武鉄道からの寄付を受ける形で、新座での新校地の買収を実現した。大学の一部を移転するという構想は、その過程で直接には沿線振興

を議論む東武鉄道の意向も受けたが、基本的には拡大路線を進める松下院長・総長が、高校側の構想を換骨奪胎したという面もあった。

だが、高校の移転は早期に実現したものの、大学の新座キャンパスの開設は一九九〇年にずれ込むことになった。その要因と影響については今後の課題とせざるを得ないが、高校だけが池袋を離れ、多くの私立大学が郊外キャンパスを設置する中、大学が池袋だけに留まり続けたことは、高度成長期以降の立教の特質を考える上では、重要な要素だと言えるだろう。

註

- (1) 宮本雅明『日本の大学キャンパス成立史』（九州大学出版会 一九八九年）。
- (2) 木方十根『「大学町」出現 近代都市計画の錬金』（河出ブックス 二〇一〇年）。
- (3) 拙稿「キリスト教学校における大学設立問題とキャンパス計画―大正期における青山学院を中心に―」『立教学院史研究』七号 二〇一〇年、「キリスト教学校におけるキャンパスの建設と建築家―ラルフ・アダムス・クラムの立教大学和風建築案をめぐる―」『立教学院史研究』九号 二〇一一年、「立教大学池袋キャンパスの建設とヘンリー・K. マーフィー」『立教学院史研究』一〇号 二〇一二年。
- (4) 前掲『「大学町」出現』二二―一八頁。なお木方は全体では五つの時期に区分しているが、ここでは便宜上、本稿では二つの時期に集約した。

- (5) 石塚裕道『日本近代都市論 東京…一八六八—一九二三』（東京大学出版会 一九九一年）二二六、二二七頁。
- (6) 棚村恵子『しなやかに夢を生きる 青山学院を拓いた人 ドロー・E・スカーンメーカーの生涯』（青山学院 二〇〇四年）。
- (7) 青山さゆり会編『青山女学院史』（青山さゆり会 一九七三年）五五～九四頁。
- (8) 小檜山ルイ「宣教師と現地人の権力関係」『キリスト教史学』（五六号 二〇〇二年）。小檜山は、平塚益徳の①宣教師の主導にかかるとの②相対的に日本人の発言力のあるもの③日本人だけで学校を運営するもの（前掲『日本基督教主義教育文化史』九四頁）という、ミッシェンとの関係によるキリスト教学校の類型を継承した上で、空間的な要素を加味している。
- (9) 立教大学立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』（立教大学 二〇〇七年）三三三、三四頁。
- (10) 立教学院百二十五年史編纂委員会編『Bricks And Ivy 立教学院百二十五年史 図録』（学校法人立教学院 二〇〇〇年）一四頁。
- (11) 青山学院編『青山学院九十年史』（青山学院 一九六五年）六三頁。
- (12) 前掲『青山学院九十年史』五六～八三頁。
- (13) 前掲『青山学院九十年史』三七～四八頁。
- (14) 前掲『青山学院九十年史』一〇三～一〇九頁。
- (15) 比屋根安定編『青山学院五十年史』（青山学院 一九三三年）三頁。
- (16) 前掲『青山学院五十年史』五～七頁。
- (17) 「東京英和学校規則 第三条」『東京英和学校一覽』（青山学院資料センター所蔵）。
- (18) 鷺山弟三郎『明治学院五十年史』（明治学院 一九二七年）一七九頁。
- (19) 学院百年史編纂委員会編『学院百年史 第一編』（学校法人学院 一九八一年）六〇五～六〇九頁。
- (20) "What the Church in Japan Most Needs", *The Spirit of Missions*, March 1909.
- (21) 奥村芳太郎編『大学シリーズ 立教大学』（毎日新聞社 一九七一年）八四頁。
- (22) 立教大学立教学院史資料センター編『The Spirit of Missions 立教関係記事集成 第三卷』（学校法人立教学院 二〇一一年）二四七頁。
- (23) 前掲『立教関係記事集成 第三卷』二四一頁。
- (24) 同右。
- (25) 「立教大学の拡張計画」『基督教週報』一八卷一九号 一九〇九年。
- (26) 前掲『立教関係記事集成 第三卷』四九八頁。
- (27) 同右。
- (28) 前掲『立教関係記事集成 第三卷』二六七頁。
- (29) "What the Church in Japan Most Needs".
- (30) 同右。
- (31) 前掲『立教関係記事集成 第三卷』二五四頁。
- (32) 前掲『立教大学の拡張計画』。
- (33) 同右。
- (34) "What the Church in Japan Most Needs", *The Spirit of Missions*, March 1909.
- (35) 前掲『立教大学の拡張計画』。
- (36) "St. Paul's College, Tokyo. Fund to June 1st, 1910", *The Spirit of Missions*, July, 1910.
- (37) 前掲『立教大学の拡張計画』。
- (38) 同右。

- 39) 前掲「立教大学の敷地」。
- 40) 前掲『立教関係記事集成 第三卷』二六六頁。
- 41) 前掲『立教関係記事集成 第三卷』三六一頁。
- 42) 豊島区郷土資料館編「えきぶくろ…池袋駅の誕生と街の形成…2004年度第1回企画展」(豊島区教育委員会、二〇〇四年)。
- 43) 「師範学校敷地問題」『読売新聞』一九〇八年六月一六日。
- 44) 成蹊学園編『成蹊学園六十年史』(学校法人成蹊学園、一九七三年)五八〜六一頁。
- 45) 東京学芸大学二十年史編集委員会編『東京学芸大学二十年史』(東京学芸大学二十年記念会、一九七〇年)五九六、五九七頁。
- 46) 前掲『東京学芸大学二十年史』五九六頁。
- 47) 前掲「立教大学の拡張計画」。
- 48) 同右。
- 49) 豊島区史編纂委員会編「豊島区史地図編下」(東京都豊島区、一九四七年)三五頁。
- 50) 『池袋 登記済権利書』立教大学立教学院史資料センター所蔵。
- 51) 『土地概評価』北豊島郡西果鴨町大正十年五月調(東京興信所、一九二一年)二五頁。
- 52) 基督心宗教団編『押川方義川合信水両先生往復書簡集』(基督心宗教団事務局出版部、一九八一年)八一頁。
- 53) 大塚栄三『聖雄押川方義』(押川先生文書刊行会、一九三二年)六一〜六八、八七頁。
- 54) 例えば「一大地所の紛擾」『東京朝日新聞』一九一〇年二月九日。
- 55) Henry St. George Tucker, "Exploring The Silent Shore of Memory", *Whiter & Shepherson*, 1951, p.151.
- 56) 松平惟太郎「聖公会神学院史」聖公会神学院史編纂委員会編『聖公会神学院百年記念誌』(学校法人聖公会神学院、二〇一二年)。
- 57) 『立教関係記事集成 第三卷』三六一頁。
- 58) 東京府公文『第1種 文書類纂・学事・第7類・私立学校・第3巻』(東京都公文書館所蔵)。
- 59) 「移転広告」『基督教週報』二六卷四号、一九二二年。
- 60) 『聖公会神学院』『基督教週報』二六卷五号、一九二二年。
- 61) 『立教関係記事集成 第三卷』四五七頁。
- 62) 前掲「聖公会神学院史」。
- 63) 東京府公文『第1種 文書類纂・学事・第7類・私立学校・第3巻』(東京都公文書館所蔵)。
- 64) 五島慶太「電気鉄道の合理化」『交通事業の合理化』(日本交通協会、一九三二年)一五三頁。
- 65) 佐藤菊三郎「復興学生会の憶出」前掲『青山学院五十年史』。
- 66) 米山梅吉のこと。
- 67) 古坂富城「故人の印象」米山梅吉先生電気刊行会編『米山梅吉伝』(青山学院初等部、一九六〇年)。
- 68) 関西学院百年史編纂事業委員会編『関西学院百年史 通史編1』(学校法人関西学院、一九九七年)九二頁。
- 69) 前掲『関西学院百年史 通史編1』四三五頁。
- 70) 「河鱒節」(シリーズ)『関西学院の人びと』『関西学院史紀要』一四号、二〇〇八年。
- 71) 菊池七郎「河鱒節氏を想ふ」河鱒信編『菊に偲ぶ…故河鱒節追憶』(河鱒信、一九五六年)。
- 72) 同右。
- 73) 「天井知らずに騰る阪神沿道の地価(三)」『大阪毎日新聞』一九二二年一月三日。

- (74) 前掲「河鱗節氏を想ふ」。
- (75) 神崎驥一「学院の恩人」前掲『菊に偲ぶ』。
- (76) 前掲『関西学院百年史 通史編』四四〇頁。
- (77) 前掲『関西学院百年史 通史編』四四三頁。
- (78) 中央大学百年史編集委員会専門委員会編『中央大学百年史 通史編 下巻』(中央大学出版部 二〇〇三年)二六七頁。
- (79) 法政大学編『法政大学百年史』(法政大学 一九八〇年)三五九頁。
- (80) 松下正寿「希望にみてる立教大学」『立教』一号 一九五六年。
- (81) 松下正寿「のびゆく立教」『立教』一一号 一九五八年。
- (82) 「対談・新春に語る」『ニュース・セントポール』八五号 一九五九年。
- (83) 縣康『神に生き教育に生き』(立教英国学院後援会 一九九三年)一三四、一三五頁。
- (84) 縣康「高校の移転について」『ニュース・セントポール』一一二号 一九六〇年。
- (85) 前掲『神に生き教育に生き』一三四、一三五頁。
- (86) 同右。
- (87) 前掲『神に生き教育に生き』一五一頁。
- (88) 東武鉄道社史編纂室編『東武鉄道百年史』(東武鉄道 一九九八年)五八四、五九九頁。
- (89) 立教学院百二十五年史編纂委員会編『立教学院百二十五年史 資料編 第二卷』一七二、一七三頁。
- (90) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第二卷』一七四〜一七五頁。
- (91) 前掲「対談・新春に語る」。
- (92) 同右。
- (93) 拙稿「幻の妙義山立教大学」『立教』二二一号 二〇〇九年。
- (94) アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝アントニン・レーモンド』(鹿島研究所出版会 一九七〇年)二五七頁。